

プロメテウス解剖学アトラス

解剖学総論/運動器系 第2版

坂井建雄, 松村譲児 監訳

＜書評者＞ 熊木克治 (新潟大学名誉教授)

G. Thieme 社といえば、古くからのドイツの名著、解剖学教科書 Rauber/Kopsch を出版している。一方、図と説明が見開きとなった新様式の Taschenatlas der Anatomie も発行し、伝統と革新を兼ね備えた信頼できる出版社である。

本書の, LernAtlas der Anatomie (物事を知る, 考える) という冠をつけて、的確なたくさんの説明がある点と、その努力と工夫を高く評価したい。書物を読まなくなった今の学生にも将来必ずや大きな糧になると確信している。このたび刊行となった第2版では、大きな改訂として臨床的重要テーマ(関節に関する疾患と画像診断、末梢神経障害とブロック、筋肉の作用と障害など)をいち早く追加した点は特筆に値する。

“プロメテウス”解剖学アトラスという神秘的で重々しい書名も、読者の誇りとやる気を起こさせるものだ。プロメテウスが造り出してくれた“人”はその形だけではなく、火を手に入れて新しい知恵を創造していく素晴らしい能力を

授かって進歩してきた。解剖学がたくさんの人体の名前を覚えるだけの暗記の学問ではなく、人体の神秘を発生学、比較解剖学、局所臨床解剖学などを通して、考える科学であることを象徴したものとしてピッタリである。名前だけでなく、それにふさわしい新しい創造の部分を用意した内容に、教えられることが多い。

つい最近、芸術解剖学の巨匠 R. B. Hale が人体の描き方のコツを説明する最終講義のビデオ解説を観る機会があった。足の描き方を説明するとき、ankle system と heel system という2つのねじれを分析している。このアトラスでも、科学的に分析するという基本が貫かれている点がノミナの羅列ではない大きな可能性を示している。

理学療法士の友人の1人が、膝関節の腫脹について大腿四頭筋と神経支配様式を解析してその原因の手掛かりを探っている。その解剖学的研究にも、また患者さんへの治療や説明の現場でも、この“プ

ロメテウス”が大いに役立ち、信頼されているという。

上肢を局所解剖学的に示す図を見たとき、そのユニークなアングルに驚かされ、なるほどと膝を打つ思いだった。すなわち、上腕、前腕、手を通して観察するとき、屈側または伸側で示す解剖学的肢位を脱却し、前腕は内側にねじった回内位の自然の状態に配置して局所解剖学的に、骨、筋、神経などを連続的、総合的に説明している点が実に画期的で新鮮である。

このアトラスは『頸部/胸部/腹部・骨盤部』『頭部/神経解剖』『解剖学コアアトラス』『コンパクト版』も訳本が出版されており、シリーズとして一層充実したものになっている。また、監訳者はわが国でも有数の解剖学者であり、誠に人を得た翻訳である。

最後に、疑問点もないではないが、伝統あるドイツの解剖学者、そうそうたる日本の解剖学者、そして多くの読者が議論を練り上げてより充実したものに発展することを願うものである。

●A4変 頁616 2011年
定価 12,600円
(本体 12,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-01068-9]
医学書院刊